

平成21年 5月25日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17255002
 研究課題名（和文） ブラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発—持続的発展の可能性—
 研究課題名（英文） Agro-ecosystem and Development in Region of Brahmaputra River Reaches—Potential of Sustainable Development—
 研究代表者 安藤 和雄 (ANDO KAZUO)
 京都大学・東南アジア研究所・准教授
 研究者番号：20283658

研究成果の概要：

本研究はバングラデシュ、インド北東地域、ミャンマーをブラマプトラ川流域の統合的地域としてとらえ、地域内の気候環境から村落の農業生態系までを結びつけながら、持続的発展の可能性を考察する総合的調査研究である。現地調査を通し、農村開発のあり方は「生産」から「文化」へとシフトすべきであること、地域間での情報交換や連携の不備を明らかにし、農村開発のあり方をアクション・リサーチ計画試案として具体的に作成した。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2005年度 | 7,100,000 | 2,130,000 | 9,230,000 |
| 2006年度 | 7,800,000 | 2,340,000 | 10,140,000 |
| 2007年度 | 7,500,000 | 2,250,000 | 9,750,000 |
| 2008年度 | 9,400,000 | 2,820,000 | 12,220,000 |
| 総計 | 31,800,000 | 9,540,000 | 41,340,000 |

研究分野：農村開発・農業生態学

科研費の分科・細目：複合新領域・地域研究

キーワード：アクション・リサーチ、農村開発、村落調査、自然災害、氾濫原、感染症

1. 研究開始当初の背景

バングラデシュ、インド北東地域からミャンマーにかけてブラマプトラ川流域地域は、南アジア、東南アジアの枠組みで区切られた地域研究において看過されてきた地域である。同地域にはベンガル民族、インド系、チベット系、ビルマ系の少数民族が多数混住し、南回りシルクロードとして知られ、古くから交易の要衝として社会経済圏を形成してきた。ヒマラヤ東部丘陵からメガラヤ、ガロ丘陵にかけて世界でも最も多雨である 5000～8000mm の年間降雨量をもたらすモンスーンは、ブラマプトラ川の本流と大小の支流河川を介して本地域の独特の自然環境を特徴づけるとともに、自然環境適応型の農業生態系を作ってきた。しかし「近代灌漑農業の拡大」「衛生的な生活を求めた地下水の飲料水源利

用」「焼畑の定畑化」「森林伐採」「氾濫原での道路網・堤防の整備」などの開発と発展の追求は農業生態系を一変させようとしている。それに連動するかのよう、地球規模の気象変動は、村人がこれまで経験することがなかった連続する雨季の大洪水害、乾季の地下水灌漑稲作の拡大による飲料用地下水の砒素汚染などの環境問題群を生み出し健康被害を及ぼすようにもなった。目的に掲げた諸点から農業生態系の特徴を明示し、村落レベルにおける農村開発のあり方をアクション・リサーチ計画試案として具体的に作成することが、本地域の持続的発展の可能性を探るために、有効であると考えられる。

2. 研究の目的

(1) モンスーン変動の地域水文環境（洪水害など）への影響 (2) 地域的な環境変化の要

因となった農林水産業などの農業生態系（農林水産業生産・生活様式・社会システム・生活インフラ<道路・堤防など>）の近年の変容。(3)個別村落における環境問題群・農業生態系の持続性に対する村人の理解と現状への対応策。(4)村落における社会経済問題、衛生・医療問題と村人がとっている具体的な対応策。(5)問題解決のための農村開発を目指したアクション・リサーチ計画策定に向けた、各地域における農村開発を担う地方行政制度、開発 NGO の実態把握と、それら組織との具体的な連携策。

3. 研究の方法

(1)調査地：ブラマプトラ川流域地域を農業形態と地理的立地条件と政治状況から調査可能性を再考慮し、以下を設定した。バングラデシュ国では①ブラマプトラ川下流のタンガイル県乾季灌漑稲作・地下水砒素汚染地域、②チタゴン丘陵焼畑農業と水田農業が行われているチャクマ族地域、インド国では、アッサム州の④ブラマプトラ川中流、洪水頻発地域、⑤ブラマプトラ川上流氾濫原アホム族地域、アルナーチャル・プラデシュ州の⑥ブラマプトラ川支流スバンスリ川地域流域の少数民族地域、ミャンマー国では⑦マウービン郡洪水・サイクロン被災地域、⑧ミャンマー中央平原と、農業生態系と文化面を考慮するために、特徴的な調査地を広く設定した。

(2)共同研究の方法：本研究が扱うブラマプトラ川流域の農業生態系は図2に示された

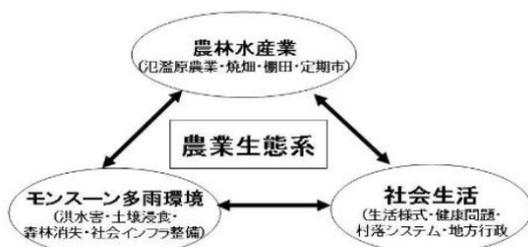


図2 ブラマプトラ流域の農業生態系模式図

「農林水産業」「モンスーン多雨環境」「社会生活」の均衡系として捉えることができる。この3つの課題を設定し、本研究を遂行するために、(i)村落開発班、(ii)地球-地域環境班、(iii)開発パラダイム班の3つのチーム組織によって共同研究を実施した。メインチームは村落開発班であり、バングラデシュではバングラデシュ農業大学、インド国ではアッサム州ではゴウハティ大学地理学科、アルナーチャル・プラデシュ州では、ラディブ・ガンディ大学地理学科、ミャンマー国では、イェジン農業大学をカウンターパートとし、地球-地域環境班の気象問題研究のために、上記の他に、インド国メガラヤ州のノース・イースト・ヒル大学地理学科、開発パラダイム班の農村開発アプローチ研究のため

に、バングラデシュ国の農村開発アカデミー、NGO (JRDS、SSS)、ラオス国のラオス国立大学農学部をカウンターパートとして共同研究を実施した。

4. 研究成果

本プロジェクトでは、各年度に3～4回東南アジア研究所で日本人メンバーが集い研究発表を行ってきた。最終的には、2008年12月19、20日にインド国アッサム州のゴウハティ大学地理学科と京大東南アジア研究所の共催による国際ワークショップ「INTERNATIONAL WORKSHOP ON AGRICULTURAL ECOSYSTEM AND SUSTAINABLE DEVELOPMENT IN BRAHMAPUTRA BASIN」を開催し、下記の個別論文が発表された。

- ① *Villager -Subjective Development in Brahmaputra Floodplain agro-ecosystems.* Kazuo Ando, Nityananda Deka & A. K. Bhagabati
- ② *Structure and Function of Periodic market in a Floodplain Agro-ecosystem of the Brahmaputra Valley.* Nityananda Deka, Koichi Usami & A. K. Bhagabati
- ③ *Study on Livelihoods in Muktapur village, Assam - tasks ahead toward sustainable rural development.* Koichi Ushami, Nityananda Deka.
- ④ *Rain-fed rice cultivation in the Brahmaputra floodplain -A case study in Lakhimpur district, Assam.* Haruhisa Asada
- ⑤ *Buried Humus Soil Layers and Land Development in Central and Eastern Himalayas.* Shinji Miyamoto and Kazuo Ando
- ⑥ *Farming System Research: Change of Traditional into Commercial floating island agriculture in Inlay Lake, Southern Shan State, Myanmar.* Khin Lay Swe
- ⑦ *Land Tenure Systems: A Study on Rice-based Farming Systems in Baghaichari muk village Khagrachari District, Bangladesh.* Chakma Shishir Swapan, Kazuo & Khin Lay Swe
- ⑧ *Transformation of resource utilization and its influence on rural life : Case study in a village in Tangail District, Bangladesh.* Keiko Yoshino
- Flood Hazards and Human Responses in the Lower Brahmaputra Floodplain in Assam. A. K. Bora
- ⑨ *Population Growth and Associated Demographic Character in Assam.* B. K. Kar
- ⑩ *Tourism in North east Region of India: Trend of Development and Issues Associated with Sustainability.* Prasanta

Bhattacharya

⑪ *Japanese Encephalitis Transmission in relation to Agricultural Activities.* Rupali Baruah, Yukiko Wagatsuma

⑫ *Impact of geo-environmental characteristics on socioeconomic settings at Lower Jirani river basin in Goalpara District, Assam.* A. Ali, S.N. Sarma, R. Barman

⑬ *Biophysical Attributes and Prediction of Summer Rice Yield in the Brahmaputra Valley.* Surendra Singh

⑭ *Improvements of Aman Rice Cultivation Against Flood damage in Jawar Village, the Haor Region of Bangladesh.* Haruo Uchida and Kazuo Ando

⑮ *Comparative Study on Local Governance and Participatory Rural Development through Decentralization in Kingdom of Bhutan and in Arunachal Pradesh of NEFA.* Ainobu Kawai

⑯ *Climate Change Impact on Health: Diarrhea Diseases in Bangladesh.* Yukiko Wagatsuma, Toru Terao, Taiichi Hayashi, A. S. G. Faruque

⑰ *Rainfall Characteristics in Northeastern Indian Subcontinent during Pre-monsoon and Mature Monsoon Seasons.* Toru Terao

⑱ *Several features and future perspective of weather condition in the northeastern region of the Indian subcontinent.* Taiichi Hayashi, Toru Terao, Fumie Murata, Masashi Kigushi, Yusuke Yamane, Shunsuke Tsushima, Jun Mutsumoto, Surendra Singh, Hiambock Syemlihe, Laitpharlang Cajee, Md. Nazrul Islam

⑲ *An observational plan about raindrop-size distribution at Cherrapunji.* Fumie Murata

⑳ *An experimental and modeling investigation of macropore Dominated Subsurface Storm flow in vegetated Hillslopes of North east India.* Rupak Sarkar, Subashisa Dutta

㉑ *Coexistence with the national park -The case study in Kaziranga National Park.* Ohnishi Nobuhiro

発表論文の題目がキーワードとして成果を示しているように、図2の視点から明かにしていくという本プロジェクトの当初の目的に沿った成果をあげることができたと言え

る。フィールド調査という研究手法のために、期間内の論文執筆を目指した分析には時間が少ないにもかかわらず、個別のメンバーは学会、雑誌論文の活発な発表があったことを特記しておきたい。特に学術的成果として、以下の点を列記できるであろう。

(1) 本プロジェクトの調査であるインド国のアッサム州とブラマプトラ州、バングラデシュのチッタゴン丘陵、ミャンマー国は、従来、政治状況のために、村落レベルでの研究が圧倒的に少ない地域であった。本プロジェクトでは、その地に日本の研究者が、現地カウンターパートとともに共同調査を行い、一次資料を収集し、現地で国際ワークショップを開催できたことは、高く評価されるべきと自負できる。アッサム州、アルナーチャル・プラデシュ州のブラマプトラ川中流域と、上流域での氾濫原、及び、その支流に立地する村の生業に関する地道な調査は、国際的にも先駆けとなる研究である。日本語のものは英語での発信を今後予定している。

(2) 農業生態系の持続的発展にとって、重要な要素となるのは、農業・農村開発のパラダイムをどうシフトしていくか、ということである。この点については、バングラデシュのNGO、ラオス国立大学農学部との共同研究が大きなヒントを与えてくれる。それは、生産から文化への開発パラダイムのシフトである。バングラデシュの洪水常襲地帯では持続的発展にとって、村の「共同的性格」は自然災害に対処する上でも大変重要であるが、近年、この社会的特徴が急速に消えつつある。これに対処するためにD村では、NGOのJRDSが村の伝統文化を新たに復興イベント化するアクション・リサーチを農村開発アプローチとして実施し、大きな反響を呼んでいる。またラオス国立大学においても、ラオスの伝統農具収集の成果を農学部の高専教育に活かしていこうという試みが行われている。また、「柵がない」アッサム州のカジランガ国立公園での希少動物の保全活動も動物と付き合う文化の問題である。文化をキーワードとする開発のパラダイムシフトの有効な萌芽を本プロジェクトの成果として実感することができた。

(3) 地球-地域環境班の「自然災害、気象と感染症」のインド、バングラデシュ、ミャンマーの国を超えた調査活動から明らかになったことは、気象データや感染症などのデータのネットワーク化が国家という制度によって阻まれ、隣接する自然環境条件が似通った大地域であるにもかかわらず、連携が進んでいないことである。特に、気象班が明らかにしたように、インド国のメガラヤ山地のチュラプンジにおける実測のモンスーン降雨の日変化のパターン(図3)とバングラデシュのジャムナ川の水深の日変化(図4)

には明らかな正の相関が見られる。

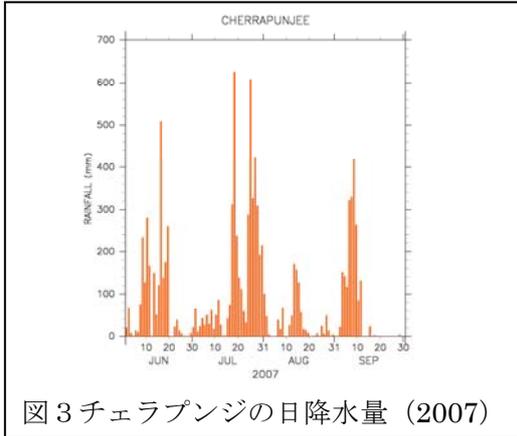


図3 チェラプンジの日降水量 (2007)

2007年のチェラプンジの日降水量の変化を見ると、この年には雨期の中に3回の活発期が見い出せる。この活発な降水に伴って、ジヨムナ川(ブラマプトラ川)の水位が上昇し、バングラデシュでの洪水が引き起こされた。特にこの年は、雨期末期の9月にも活発な降水があったため、例年のように水位が下がらず、洪水災害が長期化したのである。また、2008年のミャンマーを襲ったサイクロン・ナルギスでは死者が13万人にも及んだ。バングラデシュのサイクロン対策の経験がまったく活かされていないのである。国を超えた

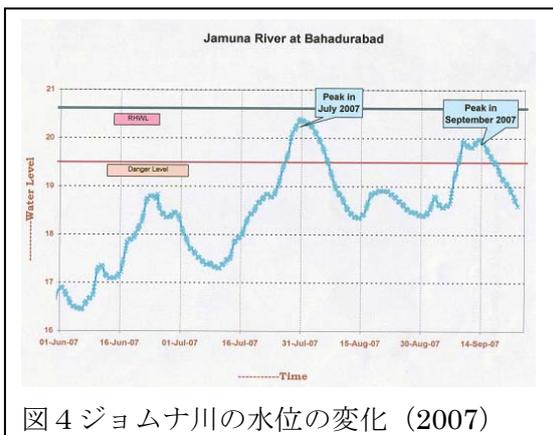


図4 ジヨムナ川の水位の変化 (2007)

地域間の連携が課題となっている。

以上の3点の要約に立脚し、2008年11月に、アクション・リサーチ計画試案として、新規に基盤研究(A)の科研プロジェクト「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」を申請し、採択され、2009年度から5ヶ年計画でアクション・リサーチを推進することとなった。また、本プロジェクトの成果を活かし、2008年5月にトヨタ財団のアジア隣人ネットワーク事業に応募し、「農村文化・歴史を重視するアジア農村発展モデルの提唱—アジアの開発途上国と日本の実践的ネ

ットワーク構築による農村文化再創造活動—」が採択され、2009-2010年度の2年間、ラオスにおいてアクション・リサーチを展開している。以上、本プロジェクトが当初結論として目指したアクション・リサーチ計画の作成という最終目的を十分に達成することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計18件)

- ① 宮本真二、内田晴夫、安藤和雄、ムハマッド・セリム、「洪水の環境史—バングラデシュ中央部、ジャムナ川中流域における地形環境変遷と屋敷地の形成過程—」、京都歴史災害研究、10巻、27-35ページ、2009年、査読有。
- ② 宮本真二、安藤和雄、アバニィ・クマール・バガバティ、「ヒマラヤ地域における民族移動と土地開発過程」、ヒマラヤ学誌、第10号、1-9ページ、2009年、査読有。
- ③ Terao, T., Islam, M. N., Murata, F., Yamane, Y. and Hayashi, T., 「Diurnal Variation of Rainfall Intensity in Pre-Monsoon over Bangladesh and the Northeastern India, Prod.」, 2nd International Conf. on Water and Flood Management (ICWFM2009), 317-326ページ、2009年、査読有。
- ④ Tsushima, S., Yamane, Y., Terao, T., Murata, F., Kiguchi, M. and Hayashi, T., 「Characteristic of Cloud System in and around Bangladesh during Monsoon Season, Prod.」, 2nd International Conf. on Water and Flood Management (ICWFM 2009), 443-450ページ、2009年、査読有。
- ⑤ Ando, Kazuo, Uchida, Haruo, Habibur Rahman and Hossain, S. M. Altaf, 「Village Leaders and Rural Development i Bangladesh」, Japan Agricultural Research Quarterly (JARQ), 42 (3), 145-150ページ、2008年、査読有。
- ⑥ 松林公蔵、赤松功博、和田泰三、石根晶幸、坂上悌二、奥宮清人、竹田晋也、安藤和雄、U Soe Mynt, Saw Khin Gyi, Daw Ni Ni Khin, Sr Mary Andrew, 「福祉老人ホーム入居高齢者の日常生活機能、うつとQOL—ミャンマーの宗教系ホームと日本の養護老人ホームにおける比較検討—」、東南アジア研究、45(3)、480-494ページ、2008年、査読有。
- ⑦ Mohammad Jiaul Hoque、Koichi Usami, 「Effects of Training on Skill Development of Agricultural Extension Workers in Bangladesh」, Journal of Social Sciences, 4(1)、21-28ページ、2008年、査読有。

- ⑧ Mohammad Abdul Malek, Koichi Usami, *「Determinants of Non-farm Employments in Rural Bangladesh: A Case Study of Comilla Sadar Upazila」*, Proceedings of Conference on Bangladesh in the 21st Century, CD版、2008年、査読有。
- ⑨ Terao, T., Islam, M. N., Murata, F. and Hayashi, T., *「High temporal and spatial resolution observations of meso-scale features of pre- and mature summer monsoon cloud systems over Bangladesh」*, Natural Hazards, 44(3), 341-351 ページ、2008年、査読有。
- ⑩ Murata, F., Terao, T., Hayashi, T., Asada, H. and Matsumoto, J., *「Relationship between atmospheric conditions at Dhaka, Bangladesh and rainfall at Cherrapunjee, India」*, Natural Hazards, 44(3), 391-399 ページ、2008年、査読有。
- ⑪ 河合明宣, *「ブータン王国における地方分権化と住民参加型農村開発の課題」*、放送大学研究年報、第25号、55-66、2008、査読有。
- ⑫ 河合明宣, *「ヒマラヤ南面の森林保全と農業景観 —ブータン調査から—」*、ヒマラヤ学誌、第9号、54-83 ページ、2008年、査読有。
- ⑬ 林 泰一, 村田文絵, 橋爪真弘, Islam, Md. N., *「2007年11月にバングラデシュを襲ったサイクロン「Sidr」の被害調査報告速報」*、自然災害科学、26(4)、391-396 ページ、2008年、査読有。
- ⑭ 林 泰一, 村田文絵, 三浦優利子, 奥勇 一郎, 山根悠介, 津島俊介, *「ベンガル湾のサイクロン災害」*、第20回風工学シンポジウム論文集、217-222 ページ、2008年、査読有。
- ⑮ 竹田晋也, *「アルナーチャル・プラデシュの生業景観」*、ヒマラヤ学誌、第8号、77-88 ページ、2007年、査読有。
- ⑯ Uchida, Haruo, Ando, Kazuo, *「Adaptive Agricultural system to dynamic water condition in a low-lying area of Bangladesh」*, Japan Agricultural Research Quarterly (JARQ), 41(1), 25-30 ページ、2007年、査読有。
- ⑰ Uchida, Haruo, Ando, Kazuo, *「Characteristics of paddy fields and irrigation in the dry season in a village of Bangladesh」*, Japan Agricultural Research Quarterly (JARQ), 41(4), 267-272 ページ、2007年、査読有。
- ⑱ 安藤和雄, *「西南シルクロードと焼畑の水田稲作からひもとくヒマラヤ東部 一地域体系研究の端緒として—」*、ヒマラヤ学誌、第8号、57-76 ページ、2007年、査読有。
- [学会発表] (計10件)
- ① ニッタ・ノンダ・デカ, アバニ・クマール・バガバティ, 安藤和雄, *「ブラマプトラ渓谷氾濫原における近年の作物栽培技術の変容—アッサム・カムループ県、ムクタプール村での事例研究—」*、日本熱帯農業学会第105回講演会、2009年3月28日、日本大学生物資源学科学部10号館1013会議室。
- ② 安藤和雄, 矢嶋吉司, 南出和余, *「バングラデシュにおけるECF (Environment Coping Forum) ケーススタディワークショップ報告—PLA研修と実践—」*、日本熱帯農業学会第105回講演会、2009年3月28日、日本大学生物資源学科学部10号館1013会議室。
- ③ 安藤和雄 (ポスターセッション)、*「日本の地域おこしと熱帯の農村開発の相互啓発の試み—JICA 農村開発研修の事例報告—」*、第18回日本熱帯生態学会年次大会、2008年6月21日、東京大学弥生キャンパス。
- ④ 山根悠介, 林 泰一, 木口雅司, 江口菜穂, *「バングラデシュにおけるプレモンスーン期シビアローカルストーム発生日の総観場について」*、日本気象学会春季大会、2008年5月21日、横浜開港記念会館。
- ⑤ 村田文絵, 寺尾徹, 林 泰一, *「チェラプンジにおける降水過程に関する研究(第4報)」*、日本気象学会春季大会、2008年5月21日、横浜市開港記念会館。
- ⑥ 初塚大輔, 安成哲三, 藤波初木, 林泰一, *「バングラデシュにおけるモンスーン降水量の季節内変動と年々変動」*、日本気象学会春季大会、2008年5月21日、横浜市開港記念会館。
- ⑦ 林 泰一, 村田文絵, 橋爪真弘, M. N. Islam, *「2007年11月15日バングラデシュを襲ったサイクロン「Sidr」」*、日本気象学会2008年度秋季大会、2008年11月21日、仙台国際センター。
- ⑧ 寺尾徹, M. N. Islam, 村田文絵, 山根悠介, 林泰一, *「インド亜大陸北東部におけるプレモンスーン・モンスーン期の降水強度と降水量の日変化」*、日本気象学会2008年度秋季大会、2008年11月21日、仙台国際センター。
- ⑨ 山根悠介, 林泰一, 木口雅司, 江口菜穂, *「バングラデシュのプレモンスーン期シビアローカルストーム発生日における南アジア域での環境パラメータの空間分布について」*、日本気象学会2008年度秋季大会、2008年11月21日、仙台国際センター。
- ⑩ 津島俊介, 林泰一, *「バングラデシュとその周辺における雲システムの特徴」*、日本気象学会2008年度秋季大会、2008年11月21日、仙台国際センター。

〔図書〕(計 1 件)

- ① 河合明宣、「アグリビジネスの展開と国際化—アジア諸国の場合—」稲本志良・桂瑛一・河合明宣編『アグリビジネスと農業・農村—多様な生活への貢献—』放送大学教育振興会、20 ページ、2005 年。

〔その他〕

ホームページ情報

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/brahmaputra/>

http://cseas.kyoto-u.ac.jp/staff/ando/ando_ja.html;

http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/web_j/syokuin/data_shokuin_1.php?meta_id=17353769&meta_ram=826364

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 和雄(ANDO KAZUO)

京都大学・東南アジア研究所・准教授

研究者番号: 20283658

(2) 研究分担者

松林 公蔵(MATSUBAYASHI KOZO)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号: 70190494

竹田 晋也(TAKEDA SHINYA)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・准教授

研究者番号: 90212026

大西 信弘(OONISHI NOBUHIRO)

京都学園大学・バイオ環境学部・准教授

研究者番号: 80378827

林 泰一(HAYASHI TAICHI)

京都大学・大学院防災研究所・准教授

研究者番号: 10111981

宇佐見 晃一(USAMI KOUICHI)

山口大学・農学部・教授

研究者番号: 10203506

我妻 ゆき子(WAGATUMA YUKIKO)

筑波大学・人間総合科学研究科・教授

研究者番号: 40400676

(3) 連携研究者

山田 勇(YAMADA ISAMU)

京都大学・名誉教授

研究者番号: 80093334

足立 明(ADACHI AKIRA)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・教授

研究者番号: 90212513

水野 一晴(MIZUNO KAZUHARU)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・准教授

研究者番号: 10293929

松本 淳(MATSUMOTO JUN)

首都大学・都市環境科学研究科・教授

研究者番号: 80165894

河合 明宣(KAWAI AKINOBU)

放送大学・群馬学習センター・教授

研究者番号: 90195024

寺尾 徹(TERAO TORU)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号: 30303910

村田 文絵(MURATA HUMIE)

高知大学・理学部・助教

研究者番号: 60399326

宮本 真二(MIYAMOTO SHINJI)

琵琶湖博物館・主任研究員

研究者番号: 60359271

内田 晴夫(UCHIDA HARUO)

近畿中国四国農業研究センター・主任研究
員

研究者番号: 20502933

(4) 国内研究協力者

佐藤 宏(SATO HIROSHI)

東京外国語大学・非常勤講師

吉野 馨子(YOSHINO KEIKO)

東京大学・非常勤研究員

石田 紀郎(ISHIDA NORIO)

京都学園大学・バイオ環境学部・教授

浅田晴久(ASADA HARUHISA)

京都大学大学院院生

シシール・ショボン・チャクマ (Shishir
Shapan Chakma)

京都大学大学院院生

(5) 海外協力者

A. K. バガバティ (A. K. Bhagabati)

ゴウハティ大学・地理学科・教授

トモ・リバ (Tomo Reba)

ラヴ大学地理学科リーダー

モハムッド・セリム (Md. Salim)

バングラデシュ農業大学・教授

キン・レイ・シュエ (Khin Lay Swe)

イエジン農業大学・教授

ソウ・ピョウ・ナイン (Saw Pyone Naing)

マンダレー大学地理学科・教授

トンリー・サヤック (Tongly Xayachak)

ラオス国立大学農学部・教授

モハムッド・アッケル・アリ (Md. Akkel Ali)

JRDS (Joint Rural Development Songstha)

代表

ハゲ・コモ (Hage Komo)

アルナーチャル・プラデシュ州ジロ中学校
教師

ニッタ・ノンダ・デカ (Nityananada Deka)

ゴウハティ大学地理学科・院生

(6) 本科研雇用者

矢嶋 吉司(YAJIMA KICHIJI)

東南アジア研究所・科研研究員

虫明 悦生(MUSHIAKE ETSUO)

東南アジア研究所・科研研究員

荒木 一子(ARAKI ICHIKO)

東南アジア研究所・科研事務補佐員